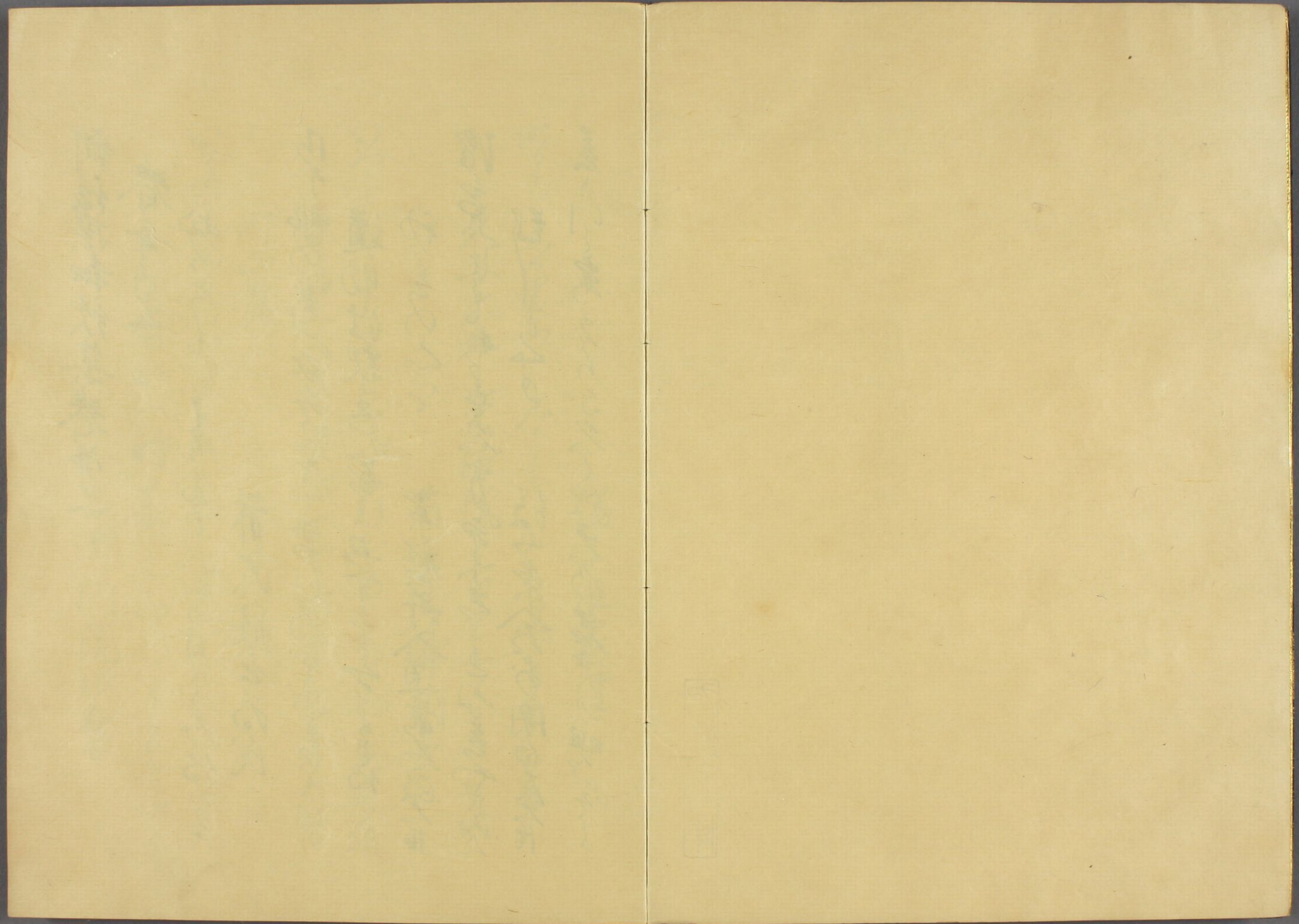




新撰和歌集上



石印



新撰和歌集卷第一

春哥上

ゆづりしにしらぬらびり日よみゆる

前大納言為氏

はな姫の歌は衣をききて寄げらるるよきいふら

道助は親王の家より五千さるるよきいふら

初まの心と 常盤井入道前を及右

深雪はじもわつとくさるるよきいふら

都しらす 垣一条入るお開白たを

まふの歌よさらふ久きれ天乃器戸の曙は

後二位家澄

何れもそふら里らるるみよの心と遠よふよきいふら

久安六年崇徳院よ百さるるよきいふら

右京清輔朝臣

いづれも子ゆらりせらるるよきいふら

貞治二の境曉祇院よ百さるるよきいふら

河山殿 弁内侍

いづれもゆらりしよきいふら

長風春水一時来ると心とよきいふら

土御門院中納言

時より尚ほ治より事しきふ所を其書を知らん
るも百々方ありてまうりけり時

正之位知家

はらわの書は治の書に似たりと云ふ風はまも云ん

初まふらんを 院御家

まやと云ふやをまきと云ふは治の書に似たりと云ふ

書身の中に 前中納言定家

春やと云ふ書は打と云ふは白書抄といふ也

久安百々方ありてまうりけり時

た京大寺殿補

打と云ふ書は治と云ふ書に似たりと云ふ風はまも云ん

百々方ありてまうりけり時

後鳥羽院御家

まよふと云ふ書は治と云ふ書に似たりと云ふ風はまも云ん

道助は親王の御書の五十百々方ありて書中

書 友系信美の御書

ゆきと云ふ書は治と云ふ書に似たりと云ふ風はまも云ん

建長六年二月首方合し書

山階入道大右衛門

治よりよりの書は治と云ふ書に似たりと云ふ風はまも云ん

今よりいふはしむるは見えぬはるは書にあり
書中著業とていふなり

前大納言為世

ふえは世の書とて分て我にありては
思ふ業と

光の筆寺合の書は改たる

あふつひの書とていふは
貞治二年に改換院の百首をとりけり
時評の業

前大納言為氏

里のいふは書とていふは
里のいふは書とていふは
并内侍

神のすむ書とていふは
百首をとりけり
時評の業

二品は親王寛助

今よりいふはしむるは見えぬはるは書にあり
朝の業と

前中納言定家

あふつひの書とていふは
百首をとりけり
時評の業

はるの業

山風はしむるは見えぬはるは書にあり
弘長元年百首をとりけり
時評の業

河東と云ふと 乃上天皇

善くしていふ波もあたりやそら川のまはりの
弘安元年百首よりあてまつりし時

入道前を改めた

ふとやめし柳のつゝまをて玉のほこしよおきつる
鸞の目院屏風よ 藤原光俊現た

峯はるゝ家もあふ山にまらけとよふ梅え
高倉院位よたましりけり時家の梅と
めさねたるいふてまつりしつをゆけり

皇太后を奉養後成

九重小宮よとて梅の花宿の来末よまきとせよ

文治二年廿所入内屏風より

坂京極坊改めた改めた

梅は白く雪よとてまきとせし宿の梢よあはれおん
くく小百そつらめらとてしつはる梅

今上御覧

あのりやそつらとてまきとせし風のしそめ梅とそす
百そつらとてまつりし時梅

有原為藤朝臣

しそつらとてまつりし梅の花宿の来末よまきとせよ

建長六年二月首方合より曰く

少将内侍

わてんがこころに梅もあらずしてこそ袖のふりか

郎一らす

は皇御親

おら又白いやらん梅もあらずしてこそ袖のふりか

先師家も入道前持政家の方合ふ家申

御孫

正三位知家

こひあつた雲井より初めの起つてこそこそ子じ家

同階御孫とてつらん

前大僧正慈法

うら初めのまゝいとおあり雲乃初めつる雲乃い

妻は方乃中に 藤原門院少将

うら初めつらん初めつらん初めつらん初めつらん

文永二年七月白河殿より初めつらん初めつらん

て七百つ方乃初めつらん初めつらん初めつらん

御孫とてつらん 後醍醐院御親

みかんの初めつらん初めつらん初めつらん初めつらん

弘長元年百つ方乃初めつらん初めつらん

前大納言為家

あつた初めつらん初めつらん初めつらん初めつらん

りてとむの下細きひかり霞れをみよ
弘安元年百三十九年

前中納言為意

山嶽や嘆よきりくくを家とひてよ
院乃とれ家と申きつ時三首方合小齋間
花のふととと 八歳時澄持

まをれつる尾上の極をみえそ家
妻乃方れの中い お開白を政大臣

と雲とさねる也や嘆わらんふり
中務の宗吾親王

善財の花咲けし相飯の雲れ
中務の宗吾親王

前春後能持

きよも又雲山路よ為をそ
雲后寺花乃るふと
きつよ由くすゆ
西園寺入道おを政大臣

けり
梅家使澄持

きよも又雲山路よ為をそ

子五百番奇合

後二位家澄

しりあはし梢のけしし山はくらまきよりそむ

花とあつらん

新後撰和歌集卷第二

去方下

弘長元年百々方よりけり時記

常盤井入道前を改存

たつしほのともはるる雲とくくは油断の山はむす

正治二の頃は羽院の首々方よりけり時

友原澄信下

昔城や言るれこの旅つさねおろ雲やさくくぬん

むらす 冬上天皇

若野山尾よの橋咲ぬまのあそびたあひくはねお雲

弘長元年百首よりあてまうりけり時

前大納言為氏

山様はまらさうらけしあてはかゝるむとあつ白雲

山階念たるはあま千首よりみゆりて寄

家系をいつるむとあまの政大臣

山様白ひとたゆみけしほし霞の袖にあまらまをせ

山花とよもせ給ひり

今上御家

若殿おまをこひるよ白文あまらみけの志雲

百首よりあてまうりけり時

前関白を政大臣

いけりけり花をわんごうと様はけりけり霞の志雲

天台座主道玄

白雲のうらさりせ山様うらさりて花の色をみまや

あまの心と平貞時給は

山さみさびら雲乃白あふ様もゆふ雲れぬりの

後二位新家人住若社を方合しゆり

時玄同花式乳門院水運

見海を六木のゆえまひりてまを雲の花乃白

寛治元年十首よりあまの山花

雲

万里山跡右大臣

古壁の影よふふいしく白雲の白くもとのさうりぬり
山階入道た大臣

山風ふきそふきそ跡れ尾上の様いまるさあり
子五百番方合よ。後二位家澄

久壁むらり七葉よ様跡れそそふはふ雲れ心せ
人ふ小百そ方めされし次よ花

太上天皇

吹風を吹まはれそふ世中いゆえて様とらそ字とが
位よねまうしくきう町上乃おのこた庭記

盛久とふふいとけくまうりけり

院御家

外よりとらぬ日較やとわぬ我九重れやとの様
苑の方れ中に 前関白た政大臣

毎よと首州美の面けと身さう老木の苑まふ
権中納言云確

善ぬおの心ふもえと首と思ふ神ふおまたり
三十そ方うもせ給うけり町見苑

新院御家

九重い善ふおはは様苑うぬあてとて思ふれ

弘治元年の百三十三時

前泰後長雅

予もこれにまはして福もやまのこころを筆に書か
山花似雲とてつらと

お久徳云意宗

吾輩の書もあつては書とみてもゆふ書と振つた
先の書も入道お梅政家方合よ雲同然

光俊朝臣

善哉とあまひく書かしてえとしかかよふみえぬ歌の
守元は親王あよ五十首方よもゆらる所

宗道法師

本邦りくぬぬんや吾輩の書とて世のこころを
花の比人なりとてつらとけり

前大僧正云朔

さひやふらのゆえそふれとて花のあはしとておれん
むしーらす 西行法師

刑部卿頼輔

持ち書りしとせんゆららとてゆふのありとせよ
後二位行成

山様又と方いふのみとくつらと花やうへん

寛治元年十首言合ふ山花

前大納言為家

光の身ふくはさの地えて何とよそあつたをな

坂鳥羽院下野

水若野の杉もまてはよほそまゐる人々の志や

花芳れ中に 権中納言家定

菊のよそみよさねの梅もくさくさ雲とそ程おぼ

後京極坊政前太政大臣

朝よる露れよそいあつむんきくさ露の花れと云

権中納言長方

いづらる若野の山れままそと花のいづらる人よ

後京極坊政前太将よゆきう時伊勢勅使

よそくさりゆらふともなひくさあせ

よそくさあそとそ花のりいありわそよゆき

前中納言定家

えそとあわねや鈴麻の雲あふり持こき花

白川なるともさうへも身よゆらりてよめゆ

けり 後惠法師

ゆらんよそくさのいづらうねとそ花くさあ

新為著とらふと

澄佐朝臣

何れも別あつたの心と云ふ歌のちりふん故そみるま

郎

典侍親子郎下

中綱と魚釣
光佐郎下也

嗚ぬきいふす花のちりふんと云ふ歌のちりふん

百と云ふとらふと

前大納言為母

その心と云ふとらふと云ふ歌のちりふん

心家花と

法下家臣

その心と云ふとらふと云ふ歌のちりふん

津守圓助

都念と云ふとらふと云ふ歌のちりふん

花下惜友とらふと

祝部成茂

みこころと云ふとらふと云ふ歌のちりふん

心家花と

信實朝臣

その心と云ふとらふと云ふ歌のちりふん

月花門院

あすのこころと云ふとらふと云ふ歌のちりふん

前大納言為母の家と云ふとらふと云ふ歌のちりふん

藤原門院少将

わがよはく昔は梢の梅は風約程の雲うそをわら

ま方乃中に 強倉右大臣

うそをわらふは梅は風約程の雲うそをわら

弘長元年百三十一方うそをわら

前大納言長雅

今もわらうとてうそをわら

うそをわらうとてうそをわら

まもてわらうとてうそをわら

西行法師

うそをわらうとてうそをわら

順徳院卿

まもりも花うそをわら

常盤井入たお大臣

春寒又もらうとてうそをわら

百三十一方うそをわら

法皇御教

まもりも花うそをわら

むらうれ中に 友原為道卿

梅はうそをわらうとてうそをわら

内裏の百の文なりし時折花

右大臣

しるべき程さそひやとらと梅苑の影て風の心さへ

落苑

友原為宗卿下

ふらふらとふらふの影をうらふも風をいらす

野一らす

後人しらす

花のよもおひさしと梅風はらぬあはれなり

久安百の文なりし時

大京土まげ補

命をそらひし時も情はしらすもさめぬさへ

皇太后交を午後成

梅苑のあまりふらふと影はらぬ風よあせけらぬ

ひのふれ中に

前僧正道性

らふらふ風をいらすとさだ花のうらふあはれなり

遊義門院

あふらふれをいらすと梅苑つらとさめぬさへ

内裏の百の文なりし時折花

後醍醐天皇御下

うらふらふれをいらすと梅苑つらとさめぬさへ

久安元年百の文なりし時

典侍親子朝臣

たゆむ風よこころをこぼれよきこぬ物さか

洞院抄及家百首より花

室太后女中俊成女

まよふ風より卯のふく人のあふ山にいらる様う那

むしらす 前内大臣矣

あふりやうれをあるま風よらそまこむとれ花のこ

正二位御朝女

まよふ風よらそまこむとれ花のこ

深草氏御下

花のこよそまこむとれ花のこ

正二位御朝女

花のこよそまこむとれ花のこ

正治二年十首より合よ花

前大納言忠良

山若野の花れ白雲ふらまの梢の雲とらふ山凡

日らんとまよせ花けり

院河家

嵐吹木のりりりらるるまよとらふ山若野の花れ白雲

か五百番より合よ 醍醐入道前を改大臣

この書は美しきといゆて新刊のあつた月
百首一首とてうりし時歎冬

尚侍在原瓊子下

山吹のまはるは新のらくはわめて星のまはる
百首一首とてうりし時 崇徳院御歌

歎冬は新のゆりふあつても井のまはる
百首一首とてうりし時

平忠感下

新のわけては海流もやまればうらまへ
百首一首とてうりし時歎冬

入道おとせ下

山吹のまはるは新のらくはわめて星のまはる
百首一首とてうりし時

平忠感下

春風の吹くもみえそふれはの梢よふら
百首一首とてうりし時

前関白を政下

年とてはつとてうりし時
百首一首とてうりし時

崇徳院御歌

山吹のまはるは新のらくはわめて星のまはる
院のわけては海流もやまればうらまへ
百首一首とてうりし時

あつた御歌

新後撰和歌集を牙三

夏哥

更なるんといふを給けり

院津歌

あらしの雨や程もあはれぬの若くすき様の衣

冠不知

順徳院中歌

山城の山をたふれぬ人のして下草いそぐなまはり

任在社とてよみくまひけり百首方中に

皇太后宮女俊成

いふこと日影よむふあひ草月のつれ枝をた

紫の使うそといはれをゆけり

藤原為房下

とよや琴とてしらぬあひ草よはてしなく

友の方れ中に 権大納言藤原

河島とていふとありはかしくとてとて琴はるる

子五百番方合よ 前大納言忠良

悲いねとていふとありはかしくとてとて琴はるる

弘長元年十首方合てまつりせりといふ

聖郭云

苑山院内大臣

あつたそのよの糸思ふとわらひけり郭云い

由てとあるたのめとをて阿多いりまてその心はえ

二藤之澄捕侍

立わく袖うやまの郭云しとていふは村乃事

平時村おた

あつてまゝ我んとう郭云さういふなりもつとあり

義久元年内裏より合曉郭云

前中納言定家

阿多いりありの心うしとや里へまてまらん

洞院持政家百三より郭云

藤坐の院少将

ふとみと出り阿多まててのこそ袖言たらん

な方れ中に 平宣時約下

阿多まてはゆりて約くのおまてやうふ袖言た

道助は親王家五十より中い郭云

は平寛寛

まふとたうとて阿多いりその心は

弘長元年百三より中い郭云

後二位行家

是安の心阿多なりとぬありゆきまての心は

部一らす 藤原澄祐朝臣

志くはれし未だ河名あり置らざる初書あり
後法性寺入道前冥白右大臣は約々河
家より百首方より約けり小河名

刑部卿頼輔

おふまゝあゝや三おらん河名我初書とさく
にけりしと 平氏

いふおとけりしと 郭公まゝはれは復の初書
院より千首方なりし河名郭公

入道おとけりし

置らざるは河名とて今もくはりし

洞院坊政家百首方郭公

前入納公為家

河名をのふり初書なりその山は今おれし
正治二年十首方合は同く

お中納公為家

約ありしらの中山ありしに初書つてきりし
約しらす

前中納公為家

まら儀を初書ありし河名を初書いさる
河名雲おれしに初書いさる

阿多阿多

法平長壽

郭云と一志と結るもや明つるこゝも明いさめん

友原雅孝御下

つきてまふ惟ふこゝん阿多ささる成つるよるの二部

源俊頼朝臣

阿多ささるはゆふささるまの阿多乃人よこん

權中納言經平

阿多ささるはゆふささる阿多乃人よこん

五白書方合ふ 直秋の院母後

阿多ささるはゆふささる阿多乃人よこん

友方れ中に 前た其末善教定

中てはゆふささる阿多乃人よこん

高治親王

阿多ささるはゆふささる阿多乃人よこん

後二位氏久

そのつゝ阿多ささる阿多乃人よこん

祝部成伸

郭云のつゝ阿多ささる阿多乃人よこん

よこん

河島書院のついでにふたつとあるがそのゆゑに程長と
書信百とあるとてまづりける河島郭云

前大納言基良

郭云はもと惟うかへりんそのあきけそふと
弘安元年百とあるなりし時

おち細く良敷

わきまをてほらるす河島むしりりりりりり
郭一らす 式子内親王

首とふ新橋よをりて物とせぬ郭云
入道前大納言

二月のついでにふたつとあるがそのゆゑに程長と

前大納言基良

我がく首と無ふらやありし新橋よとや
子五百番方合ふ 皇太子后女大寺後成

橋よわめ枕よわふ新と首と無ふらとあり
久安百とあるなりし時

大寺大納言

くまぬおつらわめとくまぬとあるひぬら
申まともき河五月あり高蒲のねよ
て遊義門院よあるなりし時

永福院

永福院の御願書
此の御願書は
長安門院

長安門院の御願書
此の御願書は
長安門院

前大納言為家

前大納言為家の御願書
此の御願書は
前大納言為家

佐美郡下

佐美郡下の御願書
此の御願書は
佐美郡下

弘長二年内裏書

前大納言為氏

前大納言為氏の御願書
此の御願書は
前大納言為氏

前大納言為氏の御願書
此の御願書は
前大納言為氏

初月御願書

初月御願書の御願書
此の御願書は
初月御願書

信光朝臣

信光朝臣の御願書
此の御願書は
信光朝臣

安方此中に 後二位為繼

りあぬ川をいかりてふ御事を倒しそまらじ五月あ
弘長元年百三十三方とそよりし時

前大納言為氏

流つをいかりそふあ御事河せく方とあはれ御事
河五月あとらうらと

安原為信朝臣

五月あゆゆ忘らむい藤河せまそいし水まらう

前大納言為家日吉社とそ方合しゆら

よい五月雨と 後二位朝家

難波江や忘らひのこは若くも程信にゆき五月あ

兼曆二年内裏後書方合し五月あ

みゆけり 前中納言延房

五月あ田子なりすそや朽わらん衣りそいしはあれ

守貫は親王家五十三とそより

後二位家澄

立のり信の雲よあふたり室の八鶴れはとあは

むしらす 藤原門院少将

山乃乃おけの信雲とそいしねむりあ月あは

源為氏朝臣

昔月よ入あつ候の事よりと書る付月をむくあき

祝部 成久

後秋の意はにやと程は屋を入口の交月ひ

源俊定卿下

風そよふ朝の竹より月乃新秋よりとをと添ふ

衣笠田久臣

天のそよふ程あきとせよとに秋方をと秋の月ひ

名取方よりけり

前中納言定家

意の屋なりねの床より秋をみよとあつ候を

中院入道右大臣家とて水鏡警眼と

らと

道因法師

意の秋よりとねあつ候はあつ候の意せり

むしらす

後法性寺住持お書白を

と月やあつ候のねとあつ候をいふとあつ候

前入僧正守会

のやりえぬ程もとてな月をかせふとあつ候

後光の意より前法政住持

毎火の光とすくぬふよりとあつ候の意

お入納言

月おとく河よらせら舞火もあかり 樹の光をさか
百三十一番のりし時夏月

院大納言典侍

あまの露とともめて月影の涼くやう庭は草
水色もな草とらふとともあり

右原秀成

あがり下ふ清のころまをまのたけのれな草
夏方れ中に 山階入道たふは

わを院てしとくあはれあはれな草はさか
藤壁の院少将

あまの露とともめて月影の涼くやう庭は草

右原宗徳

あまの露とともめて月影の涼くやう庭は草
鳥司院梅家

あまの露とともめて月影の涼くやう庭は草
深夜堂 たき清徳伝家

あまの露とともめて月影の涼くやう庭は草
弘安元年百三十一番のりし時

安部の院田家

あまの露とともめて月影の涼くやう庭は草

建長三年秋吹田へてく方所より

りつふ

坂崎誠院沖家

いふに燈塔より中堂に定まらむ人やあらん

郡一らす 前中細玄俊光

りやふらの光とあつてあの下くれゆく雲哉

あ糸後美俊

名草乃茂と葉末くはゆは光乱てふふたふれ

曜表帯露とくくんと

田久良

夏草れつとたふと難くも露のふそち子れれ

院よ三千そ秋をりし時樹陰細涼

入道前左政大臣

涼と外もとらす山陰るこれ少室乃松の下せ

百そ命をりし時り立

前中細言為方

吹風はゆ方みえそ涼に日影つらうを云

弘長元年百そ命をりきり時日と

あふ細玄為氏

夏のあはれは風のそそぎ立のわらうを云

五百番方命 後京極坊政大臣

日くしの鳴き。風と吹きて夕日涼くその雲

都一らす 後法王寺たむ

いそしる都子らの松風。岩方とくわ水涼か

平貞時

わそ程結ひやせほ月彩を涼くうつこのぬ水

子五百書方念。惟明親王

松陰の岩井らあの夕雲とあわらや松葉

水月如秋とくふり

前大納言経房

水の面ますむ月彩の涼くあやや松林のいそしん

都一らす 后九条内大臣

吉野川流つ岩波ゆふりてあやらんや

みそ丸一つらん

新後撰和歌集卷第廿

秋奇上

守實法親王家五十首

前中納言定家

秋の風は木々の葉を吹く
久安百首より秋の風

大京大寺院補

秋の風は木々の葉を吹く
多神の秋は

秋の風は木々の葉を吹く
多神の秋は

前春後雅有

秋の風は木々の葉を吹く
洞院抄政家百首より早秋

後九条内大臣

秋の風は木々の葉を吹く
秋の風は木々の葉を吹く

秋の風は木々の葉を吹く
秋の風は木々の葉を吹く

秋の風は木々の葉を吹く
秋の風は木々の葉を吹く

秋の風は木々の葉を吹く
山階入道たふ

侍従公世

を以てひら露よりけりめいあて涙を袖よほそらん
新しらす

大進中将具氏

あなまの月日とばかりあそびて七夕つめし整りゆん
常盤井入る前を改る

雅成親王

約よりけりあそびあそびせりれその川原に秋なりき
多きとていづるもなきをそくた星に新あひの橋を結ぶ

正治二年丁酉の春よりあそびけりけり

宮秋の院丹後

天川よりそ整りあそびめたそそえそはき鶴の

せりあそびとせりけり

院御殿

秋とてたえもけり鶴の海を橋のたき整り

前大納言長雅

あそびあそびせり橋やせりあそびのあそびあそび整り

権中納言公雅

漕よりあそびよのそほそそ雲のあそびあそび

并治親王

拂よあそびあそびせりあそびあそび整りあそびあそび

七月七日内裏よせむらりし時

前大納言為世

夫能く君をばてかゝる水雲あふたえぬ里合の
故京極坊政家百番守合り

お中納言定家

煉よいぬえぬ里合の山よ交て光るくく庭おり火

七夕と

新院御歌

秋風もかゝ涼くかゝり也天は星合の光や交り

まゝ交り又通重

彦星は契ぬえせぬ能くして夫新くさつ天の里

百さうちをてまうりし時七夕

友原為相朝臣

ゆらき神おしりし鶴のよりふく天の川原

ま日の社よゝゝそをりけり方れ中に

前大納言為氏

秋風と光の神えよ結えてもこぞ也とに海あり

子五百番守合ふ 故京極院御歌

玉祥のたれ芝草打おひさふき交り枯風を吹

秋方れ中に

藤原伊伝朝下

川のさかす病のさゆり風とささくもささく山と神お

すん

山階入たたる長家十を方小園春秋風

三系入道内大臣

人のみお宿の秋原多の事て秋と風のつるいふ事

野一らす

法皇御製

秋と物とともや秋のそれ凡し月世むじりかならん

光の原ち入たお秋の家秋二千その方中に

年内侍

ありそら秋の風乃多の事まされお物と秋の夕言

野一らす

西行法師

秋のそと吹とそら秋のそら秋のそら秋のそら

弘安八年八月十五夜三千その方なりし時

秋風入簾

津守圓助

頃なり秋のそとつるいふ事そら秋のそら秋のそら

秋の方中に

平河氏

秋のそら吹とそら秋のそら秋のそら秋のそら

平宣時朝下

惟つ又秋風そら秋のそら秋のそら秋のそら

秋の方合よ秋のそら秋のそら

前中納言俊定

秋のそら吹とそら秋のそら秋のそら秋のそら

種會者大に

種會の御書と云ふ物と云ふ八重の志やら秋の言

上御門院御書

有る御書と云ふ御書に種會の御書と云ふ御書

子也百書の方合ふ 惟明親王

ゆへに御書と云ふ御書に種會の御書と云ふ御書

百首の方合ふてまつりし御書

天台座主道玄

多の御書と云ふ御書に種會の御書と云ふ御書

三十首の方合ふてまつりし御書

新院御書

夕暮の御書と云ふ御書に種會の御書と云ふ御書

後光朝長御書と云ふ御書に種會の御書と云ふ御書

辛酉首の方合ふ 後二位御書

夕暮の御書と云ふ御書に種會の御書と云ふ御書

弘長元年百首の方合ふてまつりし御書

常盤井入道おとせ御書

種會の御書と云ふ御書に種會の御書と云ふ御書

秋の方の中に 入道親王御書

種會の御書と云ふ御書に種會の御書と云ふ御書

よみ人志す

わよめといふは聖女御也にらめくことなる

建長二年九月十三夜十時方合よ

弟親 冷泉を改大后

御まき聖原二の原ふらわらぬ子孫

新と 仁和寺二弟親王也

ふゆらぬ杖あはるらん我に世の病

百さうしとせ給けつとれおし

法皇御意

いふなりてまら秋の葉は綿乃露

権大納言

あらしむる雪はうきうきあけよ

新と 氏部 資宣

みの輝と程あらしめて露のそら

年親清女

あらしむる秋の葉今よりや下葉

式部 久明親王

はく麻の涙とさく小萩の葉も

権倉右大臣

うらむと雪られかや打あひさ

子丑百番方合ふ 宗蓮法師

さしあつらんしのれをすも思ふのこれ押麻るゝ志

建保三年内裏寺合ふ

信實朝臣

秋の聖におもまゝの麻のほろこりやまよと恋はる

むらす 前巻後雅有

文城の本下露よあらおきてまよる麻のまよと

は暁院御衣

卯よ又聖るまをわらを おろほとく故わら

文永二の九月十三日秋五の方合ふ 野麻

吾部 隆親

これも又老乃友とそぬふりこさてふれ 押麻れ志

秋のよらんを尋てまのふまよりまに麻

乃鳴くれい 西行法師

麻のねとさくいつまも何人の心とらんまの心

むらす よし人あか

うらまを我身ひらけをまよとあかひまよる麻を

百首方なり 時秋夕

照慶門院一條

そら程とれを物とさるれ志さるはり物か

秋分れ中に 後二位氏久

乙未のしほしほの月に出やるとまの山をみのりて押麻呂志
中務卿宗尊親王

小翁系新を披露のむとせと祿りせて麻呂志と云
法眼を交融

風多^まみの^りの^り志の^り系^と妻^とを^て露^けけ^らる^るは^は比^のの
田家麻 平時村下

い^まま^まの^り物^をさ^さく^す山^の田^のい^ちの^りね^をお^とす^の勢
清輔朝臣

宗^と妹^との^り物^を麻^呂の^り志^との^り的^のつ^つ祿^を成^るり

権中納言云雄女

頼^じつ^とあ^ら玉^つの^り志^との^り物^をお^とす^の勢
常司院師

原^との^り志^との^り物^をお^とす^の勢^との^り志^との^り物^をお^とす^の勢
土御門院水鏡

交^りの^り志^との^り物^をお^とす^の勢^との^り志^との^り物^をお^とす^の勢
衣笠内大臣

明^方の^り志^との^り物^をお^とす^の勢^との^り志^との^り物^をお^とす^の勢
弘長元年百首方あてより一時勢

常盤井合前大臣

明りたるうらなひのさきづみあはれ川舟の舟のさき

秋ふれ中に 土御門院御歌

うらなひの鶴あはれうらなひの鶴あはれうらなひの鶴あはれ

は下定為

あまのよむ破入の蓬屋をえくふ音吹のさきづみ

入道あはれ下

あまのよむ破入の蓬屋をえくふ音吹のさきづみ

友原泰宗

あまのよむ破入の蓬屋をえくふ音吹のさきづみ

月ふれ中に 源兼氏の歌

あまのよむ破入の蓬屋をえくふ音吹のさきづみ

友原為道下

あまのよむ破入の蓬屋をえくふ音吹のさきづみ

あはれ下

あまのよむ破入の蓬屋をえくふ音吹のさきづみ

あまのよむ破入の蓬屋をえくふ音吹のさきづみ

あまのよむ破入の蓬屋をえくふ音吹のさきづみ

順徳院御歌

あまのよむ破入の蓬屋をえくふ音吹のさきづみ

土御門院小宰相

風をよみてはふもとのいづれに月が出つじし海

平宗宣

程のゆく雲はさるよはふそり嵐よむふ秋の月

百そり方とそまうりし月

前中細云有房

音のゆく体身入る言は難風よ月よみのゆくをる志

建治二の九月十二の夜五そり方よ

あ中細云有房

よみのゆく月よりのゆくにや晴てゆのこをそりかき雲

松月と云ととと 後光の君も折政たを

岩よめは松のむとふは光とよむ嵐のよよ月そめり

清輔のたあよそり合しゆるるふ月す

後惠法師

あふとゆりてやかほはほ輝の月雲吹くゆせふらせ

西園寺入道前太政大臣あそり開月とる

ふとよのこゆりつ 信実朝臣

秋風よ不破の雲屋れあきまもこも行くぬまそ

月そりるら

新撰撰和歌集卷第五

煇奇下

弘安元年百三十一号

入道おと政大臣

わきそ光とて照月の桂のまよはれとせそや

中納言家成家奇合り

刑部つか光

天の雲乃波ふれ枝の秋なるるる月乃けそのけ

文永二年九月十三夜五号合よ河月

光後朝臣

初瀬川おそく浪の音なりとらやふすあつ初月

日五年九月十三夜白河夜五号合よ河

水院月 前右兵衛督為教

秋の月を初とてみよはれは白河の水

は平憲実

まよれつと初とて初と白河の水とて

院 法眼源義

ゆの湯や初とて初と白河の水とて

院大納言典侍

秋の月を初とて初と白河の水とて

子文百歳をうけし。後二位家澄

後の元月、神代のもとの松乃梢。遊をそゆ

文永七年八月十五夜内裏丑のうけし海月

前大納言具房

雲のぬるれ入りの志和風。漆とひてとある月け

冥月とあること。坂崎藏院中家

このうけし月とあること。や海をられ開けおるなをうけん

建長二年九月十二夜十のうけし合し景

月。お大納言資季

清見の雲とあること。海風。月をそよとひ波の響

海月とあること。よきせ給けり

今上御覧

りかやう燈もあえて松乃梢をうけし。此後よろこ月け

弘長元年百のうけし。けり海月

前大納言為氏

志和風の浪を衣袖とて。月。孤うと海にうけ

む。津守四冬

り何やう燈かそそす。乃のまおる。神とて月をう

文永七年八月十五夜内裏丑のうけし海月

後二位家澄

月よあつたきりふら松のまきの初す浦風を
洞院抄及家百のうらふ月

藤原門院少将

よこはなわやく松のひくらんを吹を月と分りす

建仁元年八月十五夜松のうら撰方合は月前

松風とつらとと 望を松のうら撰方合は月前

月の影をうら海松風は松のうらとつらとつら

八月十五夜十首方合はまつり時秋浦

津守四助

浦のうらわらふをうら松のうらつらとつらとつら

海島月と 津守四助

久松のうらわらふをうら松のうらつらとつらとつら

堀河院よ百のうらとつらとつらとつら

権中納言四信

風のうらわらふをうら松のうらつらとつらとつら

都のうらとつらとつらとつらとつら

風のうらわらふをうら松のうらつらとつらとつら

尚侍友原理子御下

吹まらぬ風をうら松のうらつらとつらとつら

中務の宗尊親王

此の宗生田の毒よんて月小と母の終せ

前僧正公朝

美日野の野也此院にありて月小と母の終

権大納言師伝

あつてゆく末とて月小と母の終

中務卿宗尊親王家の合

前春後徳信

宗生田の毒よんて月小と母の終

文永七年八月十五夜おまふれ次野

月とて月小と母の終

乃つまのいんそつ秋露の終

子五百番の合 後鳥羽院の合

小山田のいんそつ月小と母の終

建仁元年八月十五夜和歌の合

家見月 前中納言定家

押藤の妻よんて月小と母の終

月小れ中納言 前中納言定家

病むとて月小と母の終

大納言重經

風とて月小の合

遊義門院大慈

任ふて夫秋月やうらみ首はとさふの

津守経國

こころの月と首のさよみはとさふの秋の

百さうなりし月

右大臣

秋の月と首のさよみはとさふの秋の

百さうなりし月

小回

は佳しなふ実白と秋

こころの月と首のさよみはとさふの秋の

百さうなりし月

秋の月と首のさよみはとさふの秋の

百さうなりし月

お大納言實教

秋の月と首のさよみはとさふの秋の

百さうなりし月

秋の月と首のさよみはとさふの秋の

百さうなりし月

百さうなりし月

秋の月と首のさよみはとさふの秋の

一

西行法師

けしむふあさむしとふきけ月と友とめとけれ
入道前を改む

別れを老とけしむふしとのいも身ふとけしむし秋の月
百とふ中い 高階宗成朝臣

うやあ老とけしむふしとのいも身ふとけしむし秋の月
弘安元之百とふ中い

前巻後雅有

あふしむし昔けしむふしとけしむし月と友とめとけれ
弘安元年百とふ中い

前巻細云の家

けしむふあさむしとふきけ月と友とめとけれ
あふしむしとけしむふしとけしむし月と友とめとけれ

あふしむしとけしむふしとけしむふしとけしむし月と友とめとけれ
後京極坊改家月五十一とふ中い

前中細云の家

あふしむしとけしむふしとけしむふしとけしむし月と友とめとけれ
建仁元年八月十五和方取撰方合よ

山曉月

望た后文事後成世

秋の月と友とめとけれ
秋の月と友とめとけれ

酒色月と云々 雅成親王

留の糸の心と云々 月影の心と云々 月影の心と云々
正法百の心と云々 月影の心と云々

後系極按政おと政大臣

藤よすもみ 野原乃出を我々もみ 今上河原
百の心と云々 月影の心と云々

今上河原

菘と云々 今上河原の面影 菘と云々 今上河原
山階入道たはた家十首と云々 今上河原
今上河原

三條入道内大臣

秋の心と云々 今上河原の面影 秋の心と云々
秋の心と云々 今上河原の面影

百の心と云々 今上河原の面影 百の心と云々
百の心と云々 今上河原の面影

遊義門院権大納言

輝の心と云々 今上河原の面影 輝の心と云々
建仁元年九月十三夜五と云々 今上河原

前大納言為氏

多の心と云々 今上河原の面影 多の心と云々

部一ノ子

源親長朝臣

是を以て惟とてとらりしとふとてさきく病まひて
守覚は親王家五十二歳あり

後二位家澄

門田ふく指業のせやをさしん若のまらやふをあり

秋中 秋ふ知

平宣時約臣

しあてと心のひまおきと月よ人の夜とてあ
弘安八年八月十五夜三千三百をりける
時り人持衣と 友原為道朝臣

風をさしとて持置りり書に月よ人の夜とてあ

前中納言為方

あつ里とてとわははは月夜おりつとてとてあ
百とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてと

右上天皇

このは麻乃さ衣とてとてとてとてとてとてとてと
建仁元年八月十五夜和号前持衣合月
前持衣 前中納言為方

秋風よ秋をさしとてとてとてとてとてとてとてと
隣持衣とてとてとてとてとてとてとてとてと

今上河原

かよりいおの宿をそぞろに人垣ねつそぞろを
むしらす 九条たか臣

おとそ風をなまぬ息子の秋を秋やよ
百々方とてふりし時持衣

たか臣経述

秋風乃月世むひのゆよ夜うらもたのま子誰と
輝の方乃中に 前大納言為世

里人そよすうゆらむむ程もやふひてそあは風を
かき

公河内院小宰相

里人の月よむ輝の素そとも心もいそよそ

源治百首方をりし時多持衣

前大納言為世

くそいそく我はえふそ昔夜とあすやまろそ
むしらす 前大僧正慈鎮

暮もそあつやや体身山松風をそ秋の秋をそ

祝部成茂

里にそ秋をそ風やそらん同くそえよそ
かき

前大納言家雅

あつ里と夜をそいとそ秋風を我のそそ

法下家信

長新からしてとさむの囁の着とのうてうたなれ
百さうもてうりし時抄な

前中納言俊定

新とまをい友よをいのか露新と袖ようさして打巻
部一とす 法皇御教

禊のうらるる菊の露ぬいじの杜とみや言
は平下定為

ふらふもらりとすうたあれたおはたまな庭の白
山階入道たは長家十首うすは杜お葉

源為氏御下

ゆき雲のうら田の森か何あまおとくれお葉は
弘安元年百さうもてうりし時

入道前を政大臣

ゆきあまのうらるる長也神苗徳乃森か本葉は何あま
洞院抄政家百さうもてうりしお葉

前大納言為家

子孫振神苗徳山の村何あまお葉とわさし澤お直
曰くや 衣笠内大臣

初何あまのうらるる山城のいもこれ杜を色付はり
山雲は恒のけりし前雲白を政大臣おり

行方一ける 前大僧正公澄

みまふふとくをのひまをたうけてまじらぬおほ
返一 お開白を改大臣

引てんあぬをさくくまじらぬおほ
形一らす 前右近大将家教

まふんお業のまのたりは下はまふく秋乃山
入道前を改大臣おとくお業とよもゆら

表文信平文意季宗

物わけ晴行雲のおさきふらみえまじらぬ
有原泰宗

いふかともぬ梢のお業に程をさつら附日那

梅家使実泰

秋の色はひとともぬきふら附日那
建保元年百々々方め一けらとらに

後鳥羽院御教

行方大僧正公澄の御教おのりよりみまひらき

言秋乃心と 院御教

昔月のこと急整れま首う粘てくぬねと粘
将子内親王

長月乃懸れ日教しとくくらのま整れお業めん

新撰和歌集卷第六

冬

初冬

後帝極括政前之政大臣

とらうけり筆乃雲乃此梢迄山ひりあのををひり

後醍醐院河原

照とじ雲はくそそ河原ゆく三津をよりそやと

初冬時多しふと

天台座主道玄

と初と又そらや冬と忘すらん神よふりは河原あはれ

建保二の五首方合ふ曉時雨

前中納言定家

ゆとらぬ波千乃雲乃あそきたゆむ花とら雪

題ふ知

お糸後雅有

初冬月とくはとそそ囀の初えれ神うとくあ

大藏之澄持

我よりあそぬ神と初冬月よそは初えと河原あそふ

氏部之資宣

今こころ老の初えよかそ初首とそとあし河原と

前中納言為意

心風よあそふ雲の晴るるとあそ初はのこは初河原

平時花

山女の吹よゆせてる花雲がらぬくもふ河原
式部之久明親王

魚をうつ尾上の雲が晴て入日ゆきぬ河原
物原業とてと中務之宗尊親王

栂の屋より木葉とけよみと河原のそとに
冬ふれ中に前権僧正教範

河原と花よりほに栂のやふ冬ふれもふ河原
魚原業友原澄佐下

冬ふれ河原と花と魚原の本葉りまてあまふれ
弘安元年百三十四年けり河原業
前大納言為家

あまのほとけとてあまの嵐の来れ本葉とて
野らす丹波尚長下

障に本葉下のある影門つくとあまの
は眼涙業

正木らるる山のたふりて本葉より冬
友原為相親王

梢より花のそとあまの冬ふれの本葉とて
建保元年百三十四年けり

光の影も入らぬ前夜は

杉もくぬすの泣き声も
なする澄祐朝下

新雪の難なるも
た道中将師良

そのつらさうも
前大納言良教

けしき秋の別よ
今上河原

霜もあはれ
そ政大臣

新雪の別は
弘長元年百々

そのつらさうも
中右祐吉

杉もくぬすの泣き声も
右兵衛定房

新雪の別は
建保五年

内裏より合はぬ霜

見まはしむひやりてそ悲なるころよのつらき月乃面

子五百番方合ふ 後二位家澄

天津袖あつ白雲よし女子う雲のうひらむそあふ

住吉社よのこそあふくまうりけり百番方

乃中に 皇太后后文年又後成

の石の月乃出かやみらねんすされ波らふ子あふ

弘安元年百番方なりし時

入道二宗親王性助

波平の雲のこころは月影は浦のとほう子あふあり

子五百番方合ふ 皇太后后文年又後成女

松浦やを海入破よの浪の月れあふ子あふなり

子馬とよのませ給けり

今上河原

開の戸かましのめやして清見こころなりし時

寛治百番方合ふなりし時

左宰相権師為経

をらる志かりひるは海風より浪あふ子あふなり

堀河院は百番方なりし時

権大納言云云

志解る備は松や風のこころは波子あふなり

有原源仲朝臣

風をみ新や交わらん志あつさりいふれみかみかきつ也
都みやこにす 後之位為継

山を新の波たの海波立たり世にこも鳴き鳥か
家よ五十そそりしのみゆきり時崎子為

入道二品親王道助

留の原漕出し舟のな子を八十鶴くれ志雪ゆかり
建保五の内裏より合し冬河風

先師家も入たお移りた在

吾輩月より風を吹く此の風よりわが海とよるは院

冬方れ中に 前入僧正美伴

吾輩川若よりおつる流つをれ山門のよみよわき見
源那長朝臣

そのつらとむ木とてしるもいさそひとていふ
山

内裏より百そそりし時抄秘法

右大弁定資

山を海に流し若波とて流して風よるくこり山門
院よ二十そそりし時河水

後之位源親子 陸奥の御云 彦彦朝臣

冬山を風をそそりし山門のよみよわき見

一ノ子

永福院

そのつゝ一子のついでに多えくふ日川のみ
三千その方めされ一次に川水鳥

院浄教

ひつと川をききてついでに山陰をく鴨をひつ
弘安元年百その方めされ一次に

法皇浄教

わ鴨の玉を麻のうら枕さふぬ浪は海をせ
一ノ子

前泰後教長

水鳥を打つぬ風を水鳥をひつと川を人

多えくふ日川のみ

後二位氏久

そのついでに多えくふ日川のみ
道助は親王家五十その方めされ池水鳥

前中納言定家

水鳥をひつと川をききてついでに山陰をく鴨をひつ
多えくふ日川のみ

前大納言為氏

浦人を水鳥をひつと川をききてついでに山陰をく鴨をひつ
多えくふ日川のみ

中務卿定家親王

多えくふ日川のみ

後二位源氏

つらりけさゆき音いさかきし
前大納言為氏よりつらりけさゆき
約つらりけさ 平親世

あつらひ自彰の言れ消ぬまをみせり
前大納言為氏

乃をりやとゆらんをそいそ
言れ約性助は親王をよき
お開白を政大臣

乃をりやとゆらんをそいそ
言れ約性助は親王をよき
お開白を政大臣

位よりけさゆき音いさかきし

世給きり

つらりけさゆき音いさかきし

後右侍人よりつらりけさ

今上御意

つらりけさゆき音いさかきし
右近中将冬基

つらりけさゆき音いさかきし
祐盛法師

つらりけさゆき音いさかきし
ゆき音いさかきし

家立音書なる命。後系極格及おと政大臣
雲ふらふ家の親をいふらん格の事とていふ光よ
後九條内大臣家百々命なり

前大納言良教

身より年々とて白髪おとすとていふ光よ
冬より申すに 入道おと政大臣

中務卿家系親王

わらふとてその後芽枯らるる格とていふ光よ
祝部忠長

おと政大臣の光武月給の事とていふ光よ
性助は親王家五千首方よりみつけし時

津守経四國物

おと政大臣の事とていふ光よ
續拾遺養後乃日言の事とていふ光よ
為氏の事とていふ光よ

前用白太政大臣

わらふとていふ光よ
おと政大臣の事とていふ光よ
おと政大臣の事とていふ光よ
おと政大臣の事とていふ光よ

鷹狩乃んぐとせ行ける

公御門院御

おしとや柏の末は宮らりてとらぬあまの物人

子五百番方余ふ二條院續成

ゆき宮人とうとらひすまはれ松かぬえぬ人しはと

冬方乃中に 去交たまふと季宗

心ぬとらやいしきふまをのたのよとらぬあ

系極

善そとらとらとらとら年たたりとらとら白書

は下長年

身より物あらきりと思らりおそとらぬ年た業

性助は親王家五十年方中に

入道おとらぬ長

とらとら月日のたるとらよとらとらとらとらとらとら

弘長元年百とらとらとらとらとらとらとらとらとら

前大納言為

五十何とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら

年たらとらとら

新後撰和歌集卷第七

離別奇

都らす

後醍醐院御歌

ふもゆきとゆも歌らん人なりおぬむふり別れ
有原仲実の信由中書少輔りける所

基俊

君の阿ららふ思はんおまはらるるむふれはらふ山雲かてを
東よゆりける人なり

権中納言定家

物への又孝飯の雲ふらふのむらねと行わたる人

也

蓮生法師

お前の雲を神よゆせとてとらふとらふむらねと行わたる人
都らす 澄佐朝臣

もろくと新末とぬ別れはらふゆらんのまゝふゆり

前大僧正澄弁 三月のつごころを日東へ
まらりけるふけりて

中務卿宗尊親王

ふふせんゆぬ雲の別とまらりて行わたる人の名は
也

前大僧正澄弁

めりらる程とまらりてはらぬおぬ雲の雲の別と

とていふはまのりきりの名は行みされ

し
よし
し

とていふはまのりきりの名は行みされ

昔毒れしうまらしむり所友原為原よ為

名そくふはらふすしともあんと契て約筆

はよはらふりすきをれしつりしけり

津守國助

昔世命がらのたよをいふをききんあれそふ

むし
むし
有原為原

契りりそめりりききわらむ世よ命がらるたよてあ

むし知
後三位忠憲

けりてありそぬ世のれをいふをいふのたそあ

よし
し

かきふ又何事それ命よあぬ別よまて極れ

とていふはまのりきりの名は行みされ

前大納言美冬

けしとていふはまのりきりの名は行みされ

静仁は親王師子乃岩屋よ筑前けり

道よゆりてゆりてゆりてゆりてゆり

お権正教範

よもすしつとをつた乃落りしと心いそよそ袖燈
也—— 静仁法師

立ちつり^う落もふら白落れをくら神おまほふ
友原京總之御ふよゆりてけり
住の月刀をくらこまこつら

津守四助

月つりをくらとんや心いそよそ一
あまれくらゆりけりよはけり
この年上人

都ふふとこひ心いそよそ

都——らす 大藏の澄持

後衣よそいあつ日ほくらと
あつまくらくらけり

福念法師

ふのあひくらりくらと心いそよそ
久世百くらくらよ 前系後教長

別乃くらと あ大納言光頼

ゆりくらよのくらくらと心いそよそ
修部一ゆくらくらけり

孫の住も申され孫の山孫よりの事と月よりの事

孫の山孫
順徳院御家

よき事と申すおの孫の事と申す事と申す事と申す事

法皇御家

若ねふ事と申す事と申す事と申す事と申す事

前中納言定家

よりみその面影いさよひと申す事と申す事

徳盛く申す事と申す事と申す事と申す事

白河院御家

よりの事と申す事と申す事と申す事と申す事

孫の山孫
後三位頼基

孫の山孫と申す事と申す事と申す事と申す事

右大臣

よりの事と申す事と申す事と申す事と申す事

平貞時御下

孫の山孫と申す事と申す事と申す事と申す事

よりの事と申す事と申す事と申す事と申す事

中務卿

よりの事と申す事と申す事と申す事と申す事

中務卿親王

うけしきく雲のへそをうけしきくをひきくしむる鏡

後方中

前大納言の家

無ふ心ひらきしきせりやこえてさめつた月

大納言澄博

鳥さぬ鳥の影の面影と月とをひきくしむる

よしみくし

都さふ海とわきし後方中をひきく神の月ひ

月乃おのつひつれつれ後方中をひきく

ゆきり

前参院雅有

立よまひ月とをひきく後方中をひきく都はるの面ひ

後の方とてある 有尔宗徳

こえり山は乃月れりぬまふさつとゆんよ海ぬ

八月十五夜十首よりあてまつりし時後

津守四助

月よゆきこのまられ秋のさ宿りしとをひきく

前参院教長家方合よ後方月

宗道法師

月乃後方の床とをひきく病のこけさ草まてり

天台座主道玄日吉社とて人ひきくめり

くさ女一そをひきく 普光園入乃お雲白たる

都ては面影をゆりけり糸のまきくは五の月

後九条内大臣
後宿

さびあらして作る糸糸と結ひたるとゆり柳はゆりて

昔月のはねまうりゆきうのりまうり

後二位氏久

都ふ今かよとむるは風は梅枝の麻とよひまき

みられ國はゆりてよみゆけり

友原頼範女

まはる吹とまきも秋風の神よおこわら白河の

後ふれ中に 法平守禅

音あふていのはなふとくきぬふとゆり秋乃梅人

正三位源資

と秋来つる山か衣りやそすその露は行や志賀え

友原範重下

こよひくまわつ神の露あつわとりやとえんかむる

正位百々乃よ 皇太后宮女守俊成

梅衣志知とねるあまはれ行露あつはやゆり

新しらす 名並内大臣

梅衣り新あつる藤のよれるやゆり中山風ふも

性助は親王あつるやうは梅

法眼源義

息をとり書てそそ弟枕寝たり書よじよいよあらん
あゝーん

平 時 久

弟枕寝てもあそそ書よじよいよあらん
前中納言定家

息をとり書てそそ弟枕寝たり書よじよいよあらん
寛治元年十月一日合よ接旨嵐

山階入道大右

貴朝とてしき徳の接衣とてしよいよあらん
二月の比あらまよいよいよあらん

てよみゆひ

息をとり書てそそ弟枕寝たり書よじよいよあらん
源清兼

息をとり書てそそ弟枕寝たり書よじよいよあらん
百々百々

前中納言有房

息をとり書てそそ弟枕寝たり書よじよいよあらん
百々百々

僧正行光

息をとり書てそそ弟枕寝たり書よじよいよあらん

野一らす

後杉朝臣

しつてあふみぬ神を清見くまはにふけを波の雲

院大納言典侍

清見くまは風をささぐり着るゆき浪の同守

前大納言為氏

清見くまは打出くまはにけの具つは波を定

友原為相朝下

あまのつひの嵐と雪持て浦らふくはあひる春

は市下清美

都多貴代くまは角田川経来乃今よるのこころ

海路と

中務卿宗尊親王

あまのつひの嵐と雪持て浦らふくはあひる春

内裏よ百そつちより一何様白

前中納言定家

吹せら風あまのつひの漆りて出る舟人

猿れちの中心にあ大納言資季

漕出の沖つ永流る波のあまのつひの程そとるけさ

心海上人

あまのつひの嵐と雪持て浦らふくはあひる春

はははは入る前開白右大臣よ約き何様白

百三十一よみ侍きつふりてつらけり

後法大寺たる信

任者乃松林若竹と枕を志さるれり月の光るか
野しらす

順徳院浄念

と海やうと枕を志さるるさるる若竹のゆりし流
るまよひの薫やれおまもと喜あり一転ふれもわら
文字の雲を語り 如影法師

都出くると秋波の枕枕を志さるる物もそる

梅心と

平親清女妹

かのつらなる色こひ出れ梅心ふりふ若竹やん

うらよめ侍きつふりてつらけり

ふつらけり 若原忠資朝臣

こひやとこひあはしむるの侍つら山ちいさなめ
と

権中納言云雄

うらよめ侍きつふりてつらけり

志を上上人

屋乃面影の侍よりの月又りつられしあつら
野しらす

よめ侍きつふり

しめふりねし系枕と志と都にたのび

百三十一 みるけり

先師著ち入道前抄及た名

しそふさふさりふ山鶴の人しむひらりそふ

ふふさふ

新後撰和歌集卷第九

釋教寺

は花経方便お其智恵の難解難念の心

と 里を后より事後成

今こそとらひしむとて門とむけの影の由はかり

辟喻お 前大細云経住

子とふたやれをくへのありせらるれやそりに迷ひは

今得を漏音上大果 了然上人

尋つる雲よりあはれいふとて又うへをふりてとみるが

授記お

后醍醐院御歌

文也其六のりつる月とていふはひてらぬの園を晴む

法下云経

法をく世に契りも法華に露るるといふるは神の

化城喻ふ 園世法師

りそめは宿ともいふて為にゆふはれはそとるを

五百才子ふ 前大僧正道実

下に流りぬるといふは法華中此法ありきなりといふ

心無價宝珠慧意内名雲

法下系系雅

下は流りぬるといふは法華中此法ありきなりといふ

前大僧正道実

多の法は玉の河に流るるといふは法華中此法ありきなりといふ

法華中此法ありきなりといふ

前大僧正道実

一とていふは法華中此法ありきなりといふ

寂冥無人智 後補此經典

皇太后后文太子後成

同人の法ありきなりといふは法華中此法ありきなりといふ

乃至心身而作摩訶薩有長劫下

仙人乃昔は蓮より生じていふは法華中此法ありきなりといふ

不徒是神教為大共光後朝臣

多の道はぬんそふらそそとてむはるそそはくかひの

不徒不

法平源為

弟の唐紫れおとする世由ひそわぬ月乃光尊

神カホ

俊彰朝臣

大空とみのりおせやそおん雲くはく月乃光尊

お我職度後應支持世經

前大納言忠良

河内人信の世経契とたのむふけそ姫よりん

是人於以道交定言有疑

八条院高倉

契とくその引未れ頼と河内は世とじと何うたけん

属累不

宗道法師

三つあとしてと神やと知とらん神とむと世あは

若为大水不漂穡其も号即得後唐

後二位光成

引あはれやそあふふとつそと後唐ありとそ程程

親普賢經中記障外

源為氏朝臣

妻の新れ兼やそに晴おんおわんけそあ月乃光尊

日押のらと

中務で宗并親王

露霜の消てそふまらけり物自ふじく筆はみら

むしーらす

安前の院大貳

世とてあえあはれの世やいむき人時り契りたき

天衣は門出あひよあつらるる代にぬわこ

とふひてあつ

前大僧正忠深

ほいこあつはの光はよ君にらつて身とをぬわ

釋教のらと

あ大僧正聖忠

物は山のらるまらまらけり物自ふじく筆はみら

むふ知

天上天皇

物はのやそめ輝乃月清きその光うらふまじめ

家は光五十五そつらよみ侍けるふ

後系極持政前大貳

物は山は乃庭よらつせと古時の若れ風をそ

久要百そつらよ

里を后文を文後成

つふまじ物はさねの月あふまじひとまを雲く

二月十五日東港宮上人のりひやつら

いーける

西音法師

二月のまれをらるるの月入はははのやそめ

むら

港宮上人

園路とて此山はよゆせけまのま月入ま
文永七年冬乃り内裏にて室此山新
のよふ山法眼の法所一ゆきり時意の
ふりゆきれん取元の音れ法とひいてさせ
山をゆけり 天台座主道玄

九重ふりてくきいふふ法の是れわんやん
山をゆけり 法皇御書

いふ入法とてせて法音はゆのむとふくぬわ
正安二年は法皇よ灌頂さつけぬてまうり
て後らふよその法も通じりよとてひいてま

前入僧正云什

こひふらふあり法のひわりてまらふ法とゆは
入日神の心と お中細云乃音

まふくふらふ心乃色とみふとていひられらひきり
理趣経歌云戯論性故眩云戯論性乃

心と 前入僧正云頌

をらふらふ心よあひのなるときり 聖方其弟末乃あうて
父母前生身即證入覺位の心と

法皇御書

誰かよこのあひふ心身とてけて又あうてははあは

成自然之不由化悟

よき人から

わきまをゆきそそみあはれはたふすこと

密厳世界 前大僧正澄弁

ゆほいそひら玉そそふあうまはれはそゆ

傳はつらふそひけき

お大僧正云付

そそはめはたふすそそい露もあふそ

一流りそそひけき

前権僧部道順

夏弟れそそひそそいそそは来たのじを

弘安元年百そそあてふり

二品法親王寛助

身とらぬらの月そそ晴ていつゆとの教と

百そそあてふり

そそ上天皇

ゆとらぬらの月そそ光とあつらひの教

そそあてふり

まよふそそあてふり

後系統括政おそ政

長夜の空に月とありて色らうく
月ありてけり秋の夜は師ありて
くりに出づる心とありて物ありて
よきなるれ来りたりおがしり
をらうとて 中院入道右大臣之義雅定

よきすう月とありて契はさすのひら
をらうとて 西行法師

とよまの月とありてさすのひら
ん月梅の心と 小侍位

ふれく月とありてさすのひら
前入僧正行尊

くさきの月とありてさすのひら
蓮生法師 松崎のまうとては
くさきの月とありてさすのひら

長夜の園路は月とありてさすのひら
をらうとて 蓮生法師

長夜の園路は月とありてさすのひら
養福の院は松系之時續と繪ようせら
てくさきの月とありてさすのひら

風ふ一美おの理と志この人

皇太后陛下御事御成

陰より光をえけ樹より三光のゆり乃龍をむと流

全量壽經軍八彩の心とよみゆりふす

名を油彩 權少僧部後卷

吾輩川流の岩波あふとよふせとよみゆりふす

具足徳お彩 中原師光彩下

二十のまの二光とよふあまのつとよみゆりふす

觸光榮彩 祝部成賢

身をゆりぬ日は乃彩と光とよふ世よりとよみゆりふす

觀之量壽經正坐為向禱親於日とよふ

しとよ 源邦長朝臣

あまのむらひ乃景が夕附日やふのゆりふす

光的遍照十方世衆乃心と

ふに彩重

弟の原光まらとよふ露ふとよみ月とよみそい彩や彩

釋教をたれ中に 大慈の澄持

立よりふをたれま景ふありのらふのれあふとよふ

是心是法の心と 常盤井入道前太政大臣

とよふ乃のたれたふとよみゆりふすのれあふとよふ

下單觀とてしるを給り

後醍醐院御製

なまらるる海乃を此のそととて運乃玉とてん
者周會

といき我ものれりよよ人乃由しあつる
阿弥波經乃親長信文の心と

天台座主道玄

姉さよらふく神よけむわあそむる月とて
之軍一向專念云量善佛

善禮法師

尺より此より是の流つをき末のひとりれり
親長至一念皆當の生は

彰宣上人

一翫もくは浮身小娘とて持ぬ佛のちひあり
一切善惡凡丈得生者

權少僧部 房敷

輝あつくころの心風よみかれそ道てり
秋あつる心と

一とらふたのこころ白あめはこころに
阿弥施經と

式子月親王

あふふありてそはのほれ難波のりみふらけり
同寺ふくあふのるふとくふふのり
あふ
郁芳門院安藝
ゆきふく出はのりてそはのほれ難波のり
久安百ふふふりり 秋後

大炊御門右大臣

世中ふふあふりふふあふりふふあふりふふあふり
合會有別離のうらみ

前大僧正守卷

拂ふあふあふ別離のうらみ

秋後ふれ中ふ 鷲司院師

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
金剛般若經不熱取法不熱取法

法布定巻

着座ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
我お阿耨多羅三藐三菩提之義提乃至言有小
は 普光園入道前雲白た巻

着座ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
寂勝王經吉祥天女ふふのうらみ

室太右大臣左大臣俊成女

らひおほひ空の月の如く人神より光をそそぐは
國覺經始知前生中來成佛生此涅槃
如耶及と云々と 前を政大臣

はあやむ浮世のわがまをそそぐは 所を後を徳
欲知るを因見する現在果

は下因易勇

教をす生かす身はとりに前の世までたつていそ
前生をそそぐ徳彰度

泰穢雅經

はあやむ世と云はるは河の橋柱多し如く今と云はる

以觀之昏即昏文朗

前大僧正忠源

村雲よとる月は程とあやむはけと光とをみる
入日經之昧耶不見般涅槃成佛前生

了然上人

迷ふかおとらぬ月を程とあやむはけと光とをみる
弘文秋九月後茲始入天台と云々と

宗照法師

長月の空の月と云はるはけと光とをみる
迷悟一如の心と 僧正花愚

こころをたゞしむ道は由りてはまゝに
一念不生 心海上人

弟の業よむとてぬるの白雲の何とたらしむるに
堀河院百々方ありけり時

春後

うね世よらえあはるる蓮のいやとる落葉のたぬ
煩惱昂 菩提のころと

今出河院近來

心よや神はけむ雲も衣けしふく心玉とけ
むらす 見性法師

しんがをよらぬは命よとて心よりけりてあ

五戒乃方れ中ふ不妄語戒 惟宗忠宗

佛の心阿しとてふそつ^{たつ}はははとなりけり

釈教の心と 龍山院内大臣

ひのたまたふとてふと立りてふとてあされ

前大納言教良

ふふせんはの母とて志ぬ身いりて海よりやとて人

香室上人

月とてふ人とうきふあかりたけりてふとてあ

狀離穢去れども 前大僧正慈鎮

凡家人のしぬけとふくまきとていふまじりあはれ
むしらす 僧正道圓

形未ゆふふいと知あつたどりあぬそとあはれ
慈道法親王

さとりとておふりむらうゆふいそあきうめあは
百首うあてふりうし何杖教

前内大臣 矣

とらうとくめいころたすまてやむまはけのあは
曰ふと あを政大臣

やふらうとては乃水のいよまれ我んそそくそとて
権中納言云雄

あふくひりきとわつは乃水そのあふとていそ
敷山の苔とあふいふゆはつれゆふゆふ人
乃をゆふ 前大僧正云澄

はの水ひらふれと枯ひてそんふいそ急そありゆ
唯穢穢乃由此有穢趣及涅槃院ゆ
んそ 権少僧部良佐

こふりとおふいふあふいふうらとていそまにゆふ
如清水珠能清濁のころゆ

法平実社

正美道りの心は清くはふりしそぬ玉の井はら
部一らす 権少僧部実方

よもすゝ志の灯をてもふもみろたふ程まふ
ほよの以佛乃水前よさふひてさひつをゆ
り

平親清女妹

まふせよふさふらふまふたふひらつはの灯
秋散の方とそ 洗覚は親王

いふふの灯をかんとかきそふふまふ
はのりり火

新法撰和歌集卷第十

神祇奇

百そふめされし 次は神祇

太上天皇

子やゆつ七代五代は神世より我わ系よはとふれ
部一らす 二品法親王光助

神も三日月よむ新き乃早鈴川あきて清く
しんふか

神の山むと女繩の一筋は彩む契らこの世はな
意木田延成

櫛りてこの石つがふまじし君とそめりられ多人

大中臣定忠御下

まゝかゝるまゝに水成は取あきて実のりかゝりて

度会新忠

くろくなまきあまてら神のみす後昔としふもてをみ

よも人しら出

君代とよきいゆら神らふあれらふいふをいじ

貞治百三十九年一けり次は実神社祝

後醍醐院御製

石清水のしとふとふ人とうとね神かうん

神祇の心と 院御製

石清水のしとふとふ人とうとね神かうん

天台座主道玄

ちもふその神の中のつらつら川の善住坊

前大僧正神助

よみは首と神とまじりては末と世に

百三十九年一せ給ひの神祇

後鳥羽院御製

あま振神やとるらんりあつて一とあすくらたの

あつてらんと 天上天皇

ふもとにさきとふね松の尾の神はらうの末の世はら
前中細云定家祖又中細云俊忠春日社
初春は春とて後三位よ叙して侍る御中
つらうけり
あふ春後雅理

神もまゝの春あはれや春日山ふらふみ春はらうの
はらう
前中細云定家

ふらうにらららとておとそめを言はれりといひ
神祇の方れ中に あを政大臣

心はまゝといふわりの春日見はらうふらうの春はら
中細云家成の御命なり

友原道隆

ふらうにおいそふ松と春の枝の子世はらあはれと神や見ら
はらう
永福の院

あはれにおいそふ松と春の枝の子世はらあはれと神や見ら
はらう
後一條入る前雲白た春

はらう又いそふ松と春の枝の子世はらあはれと神や見ら
春日社ふらうとて後春の院
春日社ふらうとて後春の院

はらうとていそふ松と春の枝の子世はらあはれと神や見ら
中務の宗号親王家百とてなり

前右春末後定

をいふにぬ神代をきくは松吹風よむく

神祇乃らんと 中務の宗系親王

任者乃らぬは松のふりふり久しとて神をい

後二位新羅家任者社より方合しゆりふ

前右兵衛尉為教

神をいふは松のふりふりふきくは松吹風よむく

久安百々方ふ 皇太后后文太事俊成

とらり浪のきくは松のふりふり久しとて神をい

前大納言経任

任者の浦松をいふは松吹風よむく

前大納言為氏任者社より方合しゆりふ

神乃松と 法眼慶輔

代をいふは松のふりふり久しとて神をい

神乃松と 津守棟國

身とくは松のふりふり久しとて神をい

任者社より方合しゆりふ

中い 皇太后后文太事俊成

和方松のたふり久しとて神をい

神祇乃らんと 津守國助

代をいふは松のふりふり久しとて神をい

廣田社方合ふ述懐

権入納云英園

あまのつら神のめくられはしつら星乃位は神のかりえ
久安百そふふ 望を居交ふ更俊成

ふふとふの社よりのらん松をあらあふふのふ
むしらす 前大納云為氏

河津や神代乃松はまのまの音るくはくせそふ
実治百そふふそふりけつ時浦舟

祝部成茂

うつらふふの浦の漕の神の山舟はれとそふ

題ふ知

天台座主道玄

くろふふの舟とてふんちひてや日暮のまはれは
祝部成茂

あひよのひく日暮れをそらやあつ七れ星のくは光よ
日暮社よふてまひけつ方乃申に

前大僧正慈鎮

あふふふのふふあふは日暮れをのてらふせ
題ふ知

法眼源義

星乃神のふ交れをそふむは鏡乃山花の月
祝部國長

柳をよじそらあまられけの物なをまきても世とわかれ

祝部成賢

神さるに我老らるのゆふをそ程しりそつ幸たふ祭
日吉社よ百とて方よりそまのりけつふ望を
后久大寺後成よりそまのりけつふ望を
ふとてしりあつりしりけつふ望を

前大僧正慈鎮

いそふ君を白いとそしりし神よあむは百指のれ
を
あむとてしりあつりしりけつふ望を

神祇乃方中に 祝部忠長

高き霧のそれを教ふ神をいれやをそそ
日吉社よゆとてしりあつりしりけつふ望を

前大僧正公澄

新と神より卯ふりしりあつりしりけつふ望を
ふとてしりあつりしりけつふ望を
ふとてしりあつりしりけつふ望を
ふとてしりあつりしりけつふ望を

前大僧正為氏

神をふとわつたまのれはめ縄よのふとてしりあつりしりけつふ望を

法皇御歌

よき神の山よりけりていかにいかに

徳聖ふまらむ世にけりていかにいかに

後鳥羽院御歌

世よりす新とけりていかにいかに

月那

